

さか立ち小僧さん

小川未明

青空文庫

こい紫むらさきの、ちようどなす色いろをした海うみの上うえを、赤あかい帯おびをたらし、
 髪かみの毛けをふりみだしながら、気きのくるつた女おんなが駈かけていくような、
 夏なつの雲くもを、こちらへきてからは、見みられなくなつたけれど、その
 かわり、もつとやさしい女神めがみが、もも色いろの長ながいたもとをうちふり、
 うちふり、子こどもたちといつしよに鬼おにごっこをしているような、
 なごやかな夕ゆう雲ぐもの姿すがたを、このごろ毎まい日にちのごとく、街まちの上うえの空そら
 に、ながめるのであります。

こんど、煉炭屋れんたんやへやとわれてきた少しょう年ねんの秀ひで吉きちは、仕事しごと
 がすむと、工場裏こうじょううらの空あき地ちで、近きん所じよの子こどもたちといつし
 よにすごす時分じぶん、こうして、ひとり空そらをながめながら、いろいろ

空想くうそうにふけるのでした。

「小僧さんこぞう、さか立ちだしてごらんよ。」と、子どもこの一人ひとりが、彼かれのそばへよると、ふいにいいました。なぜなら、彼かれが、ここへきてから、さか立ちだのうまいということが、じき子どもこたちの間あいだでひょうばんひょうばんになったからです。それというのも、秀吉ひできちが、故郷こきようにいる時分じぶんから、さか立ちだだけは、だれにも負けままいとけいこをしたからでした。で、いつでも、きげんのいいときには、こういうわれれば、

「よし、きた。」と、かけ声かえをして、うしろへ二、三歩ほさがり、前まえへのめるかと思おもうと、たくみにさか立ちだをして、さながら、足あしで立たつように平気へいきで、あちらこちらと、歩きあるまわりながら、見みて

いるものに、話しかけるのでした。

「ああ、きれいだな。あの高いえんとつの煙が、雲の中へ流れこんでいる。それが、おししの毛のように金色に光って見える。君たちにはそう見えない？」と、さか立ちしながら、秀吉は、いいました。

「金色になんか、見えないよ。」

「正ちゃんも健ちゃんも、さか立ちしてごらんよ。」

こんな長い間、さか立ちをしていたら、さぞ頭が重くなつて、目がまわるだろうと、かえつて、はたで見ているものが、心配するのでした。

「もう小僧さん、いいからおやめよ。そんなに長くさか立ちして

いて、なんともないの。」と、さつき、さか立ちをすすめた子どもが、やつきになっていいました。

やつと、秀吉ひできちは立ちたなおると、両手りょうてについた土つちをはらいおとして、

「ああ、なんともないさ。」と、笑いながら、答えこたました。

「おどろいたな、ぼくたちには、できっこない。それに、こんなことをすれば、血ちが下さがって体からだに大おおどくだろう。」と、正しょうちゃんがいいました。

「は、は、は、なんでも、ひとのできないことを、するのでなくちや、だめなのさ。」と、秀吉ひできちは、自信じしんありげに、いいました。

「それじゃ、小僧こぞうさんは、子どもこのときから、ひとのできない、

さか立ちだをしようと勉べん強きやうしたんだね。」と、武たけちゃんが、ききました。

「おれは、貧びん乏ぼうの家いえに生うまれたのだ。とうちやんは、おれが生うまれると、じき死しんだので、お顔かおをおぼえていない。おれは、まつたく、おおふくろの手て一つでそだてられた。母は親おやは、手て内ない職しよくをしたり、よそへやとわれていつたりして親おや子は暮くらしていた。おれは、小しやう学が校こうをおおえると、町まちの乾かん物ぶつ屋やへ奉ほう公こうに出だされた。そして、たまに家うちへ帰かえると、母はは、いつも、おれに向むかって、主人しゆじんのいうことを守まもり、精せいを出だして働はたらけといいった。もし、このうええ、私わたしどもが貧びん乏ぼうしなしなければならぬようなら、おまええを角かく兵へい衛べい獅し子しにでもくれなければならぬと、半はん分ぶんは本ほん気きで、半はん分ぶんは

おどかしのつもりだろうが、いったものだ。」

秀吉ひできちは、そのときのことを思い出すように、いつしかしずん

で、だまつてしまいました。

「小僧こぞうさん、角兵衛獅子かくべえじしつて、なになの？」と、武たけちゃんがきき

ました。

「まだ、知らないの。角兵衛獅子かくべえじしつて、私わたしのくには、冬ふゆになる

と、よく村むらから村むらへわたつてきて、おししの面めんをかぶったかわい

そうな子こどもが、さか立ちだしたり、でんぐりがえしをしたりして

見みせるのだ。その間あいだ、おそろしい顔かおつきの親おや分ぶんが笛ふえを吹ふいたり

太鼓たいこをたいたいたりしてはやすのだ。そして、もし、しそこないを

すると、子こどもをしかるのだ。それらの子こどもは、なんでも親おやの

ない子どもや、貧乏びんぼうの家いえから子どもを買い取かって、こんなふう
に芸げいをしこみ、銭ぜにをもらって歩あるくのだが、子どもこのもらいが少すく
いと、子どもこをいじめたり、また、めしをろくろく食たべさせない
と聞きいていた。それで、もし、おれがおししに売うられたら、しか
られなくてもすむように、人ひとの見みていないところで、ひまがあれ
ばさか立たちのけいこをしたのさ。それでこんなうまくなつたん
だ。はじめのうちは、からだの血ちが頭あたまへ下さがって、いくどめまい
がして、たおれたかしのれないが、がまんをして、しまいにはなん
でもなくなつたのさ。いまとなれば、だれが、おししなんかにな
るものか。もう、自分じぶんの力ちからで、生いきられる自信じしんがついたからな。
こんど、乾物屋かんぶつやを出でるときだつて、ちつともおれが悪わるかつた

とおも
と思つていない。すこしばかりのいわしのにぼしを犬いぬにやつたと
て、そんなに悪いわることでないだろう。なぜつて、おれの給きゆうきん金
をこれといつて、きめてくれないのだから、それぐらいのことを
したつて、なんでもないはずなのだ。」と、秀吉ひできちの話はなしはだんだ
ん、熱ねつをおびてきました。

あ
空き地ちにいた、多くおおの子こどもたちにも、その話はなしがわかるので、
みんな目めを輝かがやかしながら、秀吉ひできちの顔かおを見つめて、聞きいていまし
た。

「おれはずいぶん遠とおい村むらまで、ご用ようを聞ききにやらされたものだ。
ちようど、二里りばかりはなれた居酒屋いざかやに黒くろという犬いぬがいて、おれ
が帰かえるときに、追おつても、追おつても、ついてくるのだ。とちゆう、

ほかの犬がたかつてきて、ほえたり、追いかけたりしても、やはりついてくる。黒はだまつて、けつしてあいてにならないが、たまに大きい強そうな犬が出てきて、いじめられそうになると、どこをどうまわつて逃げるものか、ちやんと、先へいつて、おれを待つている。ほんとうに、りこうなかわいい犬だったよ。おれたちが、店へつく時分には、もうとつくに日が暮れていて、外は真つ暗だった。そして、おれが、戸をあけて、店へ足を入れると、さびしそうに、それまで立ちどまつて見ていた黒は、呼びとめても、後もふり向かずとつと、もとの道をもどつていくのだ。おれは、かわいそうで、どうしようもなかった。床へ入つても、黒のことばかり考えて、その姿が目にかんで眠られなかった。い

まごろ黒は、まだあのさびしい松並木のあるあたりを歩いてい
るだろう。もう、どのへんへいつたろうかと。ある晩のこと、ま
た黒がついてきたので、なにもやるものがないから、店さきのお
けにはいつていた、にぼしをすこしばかりつまんで、投げてやっ
た。それが運わるく主人に見つかつて、ひどくしかられた。お
まえはきようばかりでない、へいぜい店の品物をそまつにする
のだろう、そんなものは、この家におけないと主人はいうのだ。
おれは、悲しかったよ。おふくろが、どんなに泣くだろうと思
うと、おれは、身を切られるような思いがして、主人にわびたの
だ。しかし、がんこな主人は、どうしても、出ていけというの
だ。さいわい、近所で、日ごろから顔見知りの人で、そんなら、

とうきよう
東京にいい口があるが、いつてみないかと、せわしてくれたので、おふくろとわかれるのは、つらかったけれど、ここへきたのさ。

こんどの主人は、いくらいいかshれない。しんぼうして、早く大きくなつて、ひとりだちをして、かわいそうなおふくろを安心さしてやらなけりや……。」と、秀吉はいつて、なみだぐむのであります。

このときから、武ちゃんも、正ちゃんも、この遠くからきている小僧さんに、なにかにつけて、同情したのであります。

ある日の、午後のことでした。

武ちゃんと健ちゃんがパスをつれて、草いきれのする細道を、

川かわの方ほうからきかかると、からのリヤカーを走はしらせて、通とおり過すぎよ
うとする、秀ひできち吉きちに出であいました。

「おや、どこへいったの？」と、秀ひできち吉きちは、車くるまをとめて、聞ききま
した。

「ぼくたち、川かわの方ほうまで、散さん歩ぽしたんだよ。」と、二ふた人たりが答こたえま
した。

「もう、帰かえるのかい。そんなら、これに乗のせてあげよ。」と、
秀ひできち吉きちは、すすめました。

「ペスも乗のせていい。」と、健けんちゃんが、いいました。

「みんなお乗のりよ。」

「ペスもおいで、いっしょに乗のろうよ。」と、武たけちゃんが、うず

くまりました。

このとき、秀吉ひできちは、ふり向むいて、いつも見みているペスだけれど、はじめて気きがついたように、

「いい犬いぬだね。」と、ほめました。

「ああ、これでもテリヤなんだ、純じゆんすい粋すいじゃないけど。」と、武たけちゃんちゃんは、ペスの頭あたまをなでていいました。

「おとなしくて、りこうな犬いぬだよ。」と、健けんちゃんちゃんは、小僧こぞうさんさんに説せつめい明めいして、さらに、武たけちゃんちゃんに向むかい、

「こうして見みると、小ちいさくないね。ぼく、いつ見みても、小犬こいぬのよような気きがしたが、なかなかりっぱじゃないか。」といいました。

「小僧こぞうさんが、いなかいなかにいたとき、かわいかわいががった黒くろという犬いぬは、

どんな犬なの？」と、武ちやんが聞きました。

秀吉は、リヤカーを走らせながら、

「黒かね、りこうな犬だった。そんな、なにに種つて、名のつく犬でなかったけれど、おれは、どの犬よりも、黒が好きなんだよ。」と、彼は、髪の毛を、風に吹かせながら、さもなつかしうに答えました。そして、なにを思ったか、急に速力をゆるめ、ふり向いて、ペスを見ながら、

「この犬も、いい犬らしいな。」と、じつと、目の中を、のぞくようにしました。そこには、黒と共通のものがありません。なんと、その目は、すみきつて、おとなしそうで、すばしっこそう、なんでも人間のいうことが、わかるような、かしこそう

にみえるではないか。

「犬いぬつて、みんなりこうなんだな。だから黒くろもペスも、同おなじくらくいかもしれない。」と、秀吉ひできちは、いいました。

「犬いぬつて、みんなりこうなんだね。」

「どの犬いぬも、人間にんげんなんかよりは、りこうだと思おもうよ。」

「人間にんげんよりも……。」

「そう、人間にんげんのように欲深よくふかでもないし、いちど信しんじれば、氣き変がわりなんかしないからね。」と、秀吉ひできちは答こたえたのです。

二人ふたりは、そう聞きくと、深ふかくうなずかずにはいられませんでした。「こんど、いつ国くにへ帰かえるか知しらないが、どうか、それまで、黒くろがたっしやでいてくれればいいが。」

秀吉は、ひとりごとをいって、また、いっしょうけんめいに、

リヤカーを、自分たちの町の方へ走らせたのです。その後ろ姿が、ふたり二人の少年の目には、なんとなく悲しくうつりました。

あちらに、親しみのある、湯屋の高い煙突が見えたところです。

「晩に、ぼくたち、双眼鏡で、空の星を見るから、秀吉くんも遊びにきたまえね。」と、武ちゃんがいました。

「ほんとうに、おいでよ。」と、健ちゃんも、いいました。

「大ぐま座、小ぐま座、北斗星などを見るのだよ。それに、もつと遠い海王星が、雲がなくて見えるといいね。」と、健ちゃん、さも楽しそうに、いいました。

「ご飯を食べてからですね。そうすれば、おれも用事が終わるか

ら、いかれますよ。」と、秀吉は、答えました。やがて、リヤカーは、坂を下ると、道をまがって、二人の少年と犬を乗せながら、自分たちの家のある町の中へ入ったのでした。

その夜、空き地では、かたすみの方に、わずかばかりしげる草むらの中から、いろいろの虫の音が聞かれました。しかし、秀吉には故郷の、あのかぎりもなく広い田んぼから、さながら雨の降る音のように流れてくる、ひびきの高い虫の声とは、おのずから感じがちがって、もう秋の近づいたという、心のひきしまる、さびしさは味わわれませんでした。

空き地へ集まった、子どももの群れには、昼間道づれとなつた武ちゃんや健ちゃんのほかに、きみ子さん、みつちゃんなどの、同

じ年としごろの学友がくゆうたちが加くわわっていました。

「よく星ほしが見みえるかい。こんど、ぼくにかしてね。」

「そのつぎは、わたしにね。」

みんなが、先さきを争あって、双眼鏡そうがんきようをのぞこうとしているので

した。

「こんどは、小僧こぞうさんの番ばんだよ。」と、健けんちゃんが、大おおきな声こえで

秀吉ひできちを呼よびました。

秀吉ひできちは、双眼鏡そうがんきようというものを、はじめで、のぞいたので

した。しかし月つきの世界せかいの秘密ひみつは肉眼にくがんで見みる以上いじように、わからな

かったのです。いくらか、はつきりするぐらいなものです。

「どう、よく見みえるだろう。」と、武たけちゃんはさも、精せい巧こうなレ

ンズをほこらしげに、いうのでした。秀吉はこれに対して、な
 んともいわず、見れば見るほど宇宙が広いので、ただため息を
 もらしながら、双眼鏡を武ちゃんにかえして、
 「故郷では、いまごろ空をあおぐと、手がとどきそうに、空が
 近く、星が大きく、きらきら光って見えるのだから。」といいま
 した。

「まあ、そんなによく見えるの。」と、みつ子さんが、おどろき
 ました。すると、そばに立っていた健ちゃんまでが、

「そうかなあ、空気が澄んでいるんだね。」と、まだ知らない北
 国をふしぎなところのように思うのでした。

秀吉は、自分の故郷について、みんながめずらしがる、

とくいになつて、

「ちようど、大雨のおおあめ、小石がたくさん、頭を地面へ出すだ
ろう。あれと同じように、夜がふけると、青、赤、緑と、一つ一
つ空に星の光が、とき出されるのさ。」と、秀吉はいつて、さ
ながら、わが家の前に立つて、まのあたり空を見ているように、
なつかしそふでありました。

やがて、みんなと別れて、彼は工場の二階の一室へもどりまし
た。しかし、床についてからも、すぐに眠れませんでした。まく
らに頭をつけながら、居酒屋の前に立つ、高いかしの木を目に浮
かべていました。その木の下には、黒がすわつています。そして、
黒は、毎日のように、ゆき来の旅人を見送つています。黒は、

おれが、どうして、やってこないのだろうと思^{おも}っている。秀吉^{ひできち}は、いつのまにか泣^ないているのです。目^めから落^おちる涙^{なみだ}が、まくらをぬらすのでした。

だんだん、日^ひが短^{みじか}くなりました。いつしかひぐらしの声^{こゑ}もきこえなくなりました。しかし、子^こどもたちも、あまり、それを気^きにとめるものがなかったほど、自然^{しぜん}のうつり変^かわりは自然^{しぜん}でした。

「このごろ、小僧^{こぞう}さんは、病^{びょう}気^きでないのかな。」

「どうして？」

「歌^{うた}もうたわないし、遊^{あそ}んでいるときも、だまって、さか立^たちもしないだろう。」

学^が校^{っこう}へのとちゆう、健^{けん}ちゃん、武^{たけ}ちゃんは話^{はな}しました。

「そういえば、元気がないね。いつもほがらかなんだがな。遠くからきているので、かわいそうだね。」と、武ちゃんが、いうと、「帰ったら、どうしたんだか、きいてみようか。」と、健ちゃんが答えました。こうして、二人は秀吉の身の上に同情したのでした。

あちらの庭に咲いた、さるすべりの花も、一時は、紅くきれいだったが、その盛りをすぎてしまいました。夕日が、西空にせずむと、北風の冷たさを感じるようになりました。

秀吉は、両手を頭の上で組んで、ぼんやりと、遠方をながめながら、物思いにしずんでいました。

この姿を見た子どもたちは、

「きつと、自分の家を思い出したのだらう。」と、そばへいつて声をかけるのをひかえたけれど、なにか知らず、胸を細い針でさされたように、悲しみを感じたのでした。

その日は、日曜で、しかも空はよく晴れていました。もう太陽の光が、慕わしくなる季節だったので、赤とんぼが、羽をかがやかして飛びかうばかりでなしに、子どもたちが、空き地へきて、うれしそうに、遊んでいました。ボールを投げるもの、まりをつくもの、おにごっこをするもの、たがいに楽しく遊んでいました。工場の裏では、秀吉が、目の前にせまった冬のしたくのため、精を出して、たどんをならべて乾かしていました。

このとき、あちらから、きみ子さんが、一枚のはがきを手持

つて、表の方から、かけてきました。

「小僧さん、おはがきよ。」

そういうながら、きみ子さんは秀吉の前までくると、それを彼に渡したのです。

「ありがとうございます。」と、秀吉は、なにげなく受け取って、ながめると、

「あつ！ おかあさんからだ！」と、さけびをあげました。よほど、うれしかったのでしよう。暗い元気のなかつた顔がたちまち、ぱつと燈火のついたように、あかるくなりました。

これを見たきみ子さんは、

「おかあさんからなの？」といつて、彼の胸の中の喜びを察する

ごとく、自分^{じぶん}までうれしそうにはしやぎました。

「おれから、たびたび手紙^{てがみ}を出^だしても、ちつとも、たよりがないので、おふくろが病^{びょう}氣^きでないかと心^{しん}配^{ぱい}していたんだ。いそがしくて書^かけなかつたが、たつしやでいると、ごらん、ここに書^かいてある。ああ、よかつたなあ。」と、秀^{ひで}吉^{きち}は、はがきをにぎつて、こおどりました。

「よかつたわね。」と、きみ子^こさんが、心^{こころ}から思^{おも}いやりのこもつた調^{ちやう}子^しで、いいました。

「こんなうれしいことはないよ。」と、秀^{ひで}吉^{きち}は泣^ないたのでした。この日^ひから、彼^{かれ}はまた、さか立^だちもすれば、歌^{うた}もうたう、いつもの、ほがらかな小僧^{こぞう}さんになつたのであります。

武ちゃんたけと、健ちゃんけんは、この話はなしをきみ子こさんからきいたとき、ちようど、ボール投なげをしていたが、すぐやめて、きみ子こさんのところへきて、耳みみをかたむけたのでした。

「小僧こぞうさんは、おかあさんからの、はがきを見ると、すつかり元げ気んきになったのよ。」と、きみ子こさんは、いいました。

二人ふたりの少年しょうねんは、顔かおを見合みあって、

「ああ、おかあさんのことか……。」

「おかあさんのことだったのか……。」と、たがいに、ため息いきをもらしました。

健けんちゃんは、手てににぎっていた、ボールを地ち上じょうに落おとし、武たけちゃんちゃんは、しばらくだまって、うなずいていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「少年朝日 別冊冬の読み物集」

1949（昭和24）年11月

※表題は底本では、「さか立《だ》ち小僧《ござう》さん」となっています。

※初出時の表題は「逆立小僧さん」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

さか立ち小僧さん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>